

第7回 戦争を語り継ぐつどい

核兵器廃絶にむけて



田中 熙巳さん

婦人民主クラブでは二月九日、「核兵器廃絶に向けて」をテーマに、第七回「平和を語り、戦争を語り継ぐつどい」を開催、日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）代表委員・田中熙巳（てるみ）さんのお話を聞きました。田中さんは先に行われた「核兵器廃絶国際キャンペーン」（ICAN）のノーベル平和賞授賞式に参加、そのホットなニュースをはじめ核兵器禁止条約のことなど、長年の運動の体験を交えながら語りました。

首都オスロで行われ、ICANと連携して活動してきた被爆者の代表として招待された田中さんと日本被団協事務局次長の藤森俊希さんが参加しました。

平和賞授賞式に参加

「二〇一七年七月七日、人類史上初めて核兵器を違法化する核兵器禁止条約が国連で採択されました。ICANのノーベル平和賞受賞は、同条約採択への貢献が評価されたものです。ICANは国際的なNGOの連合体で、その運営委員の一人にピースボート共同代表の川崎哲さんがいます。今回の渡欧に際しては、川崎さんから多大な支援をいただきました。

実は日本被団協も毎年、平和賞の候補に推薦されながら受賞を逃してきました。今回の受賞者には日本被団協の名（そ）ありませんが、核兵器のない世界をつくらうと頑張ってきた被爆者の運動が高く評価されていると感じました。受賞を歓迎する全国の被爆者の喜びを背負って、私も受賞者の一員に気持ちを持って授賞式に参加しました。ちなみに授賞式での私

ちの席は前から二番目、ICANの役員です。その後ろ、核兵器禁止条約採択に貢献した各国の大使たちと同列でした。

式典では、十三歳のとき広島市内で被爆したサロ



2月9日、平和を願い戦争を語りつぐ

ー節子さん（カナダ在住）が、ICANのベアトリス・フィン事務局長と共に演説、会場を大きな感動で包みました。世界にはまだ一万五千発もの核兵器があります。ICANの受賞が、市民が当事者として核問題に関心を持つきっかけになることを期待しています」

核兵器を違法化する

田中さんは旧制長崎県立長崎中一年だった十三歳のとき、爆心地から三・二キロの自宅で被爆、親族五人を亡くしました。東北大学工学部の研究者だった一九八五年、日本被団協の事務局長に就任して、昨年六月まで通算二十年務めました。

「日本被団協が結成されたのは一九五六年、第二次原水爆禁止世界大会のときです。被団協の目標は、原爆の被害は国が起した戦争によるものだから、その補償はすべて国が行うべきであるということが一つ。もう一つは、核兵器は絶対に使ってはいけないということ。自分たち被爆者と同じ苦しみをほかの誰にも味わわせてはならないということ。このことを言

い続けることが被団協の大きな柱です。被爆者の高齢化の中で核兵器廃絶のための最後の大きな運動としてとりくんできたのが『ヒバクシャ国際署名』です。核兵器禁止条約の採択は被爆者が待ちに待ったものでした。条約は前文で『核兵器のいかなる使用もそれがもたらす壊滅的な人道上の帰結を深く憂慮し、その結果として核兵器が完全に廃絶される必要がある』とある。このことがいかなる場合にも核兵器が決して再び使用されないことを保障する唯一の方法であり」と厳しく指摘、『ヒバクシャ』をはじめ『市民的良心の役割』を強調。そして第一条では核兵器の法的禁止の内容として、開発、実験、生産、製造、取得、所有、貯蔵、さらに使用、威嚇などを明記しました。『威嚇』とは、核兵器の抑止政策を意味します。核保有国は核兵器使用後の惨禍を知りながら、核抑止を推進しているのです。

条約は五十か国が批准するとその三か月後に完全に効力を発するということになっています。昨年来日した国連軍縮担当

この後は、交流の場に。まず出されたのは「北朝鮮の脅威」について。この問題で大切なのは、平和的な話し合い。近海での軍事演習など、挑発しているのはむしろアメリカや日本の側ではないか。安倍政権のこの問題を口実にした軍拡も許せない。戦争は決して起こしてはならない話し合いました。また田中さんは「継承」とは「核兵器は人類が存在する限り決して持ってはいけないもの」、それを次の世代に伝えていくことだといっています。圧倒的多数の人が核兵器はない方がいいという、しかしそれが強い意思になっていない。願いを意思に変え、行動に移すことが大事だと力のもった交流の場になりました。